

語成寶、彌僧正不堪極感之氣也。

〔東關紀行〕ほむの川原にうち出たれば、よもの望かすかにして、山なく岡なく、秦甸の一千餘里を見わたしたらんこ、ちして、草土ともに蒼茫たり、月の夜の望いかならんと床しくおぼゆ、茂れるさ、原の中に、あまたふみわけたる道ありて、行末もまよひぬべきに、古武藏の前司道のたよりの輩に仰て、植をかけたる柳も、いまだ陰とたのむまではなけれども、かつくまづ道のしるべとなれるもあはれなり、もろこしの召公奭は、周の武王の弟也、成王の三公として、燕と云國をつかさどりき、陝のにしのかたを治し時、ひとつの甘棠のもとをしめて、政ををこなふ時、つかさ人よりはじめて、もろくの民にいたるまで、そのもとをうしなはず、あまねく又人の患をことはり、おもき罪をもなだめけり、國民舉りて其德政を忍ぶ故に、召公去にし跡までも、皮木を敬て敢てきらす、うたをなんつくりけり、後三條天皇、東宮にておはしましたしけるに、學士實政任國に赴く時、州の民はたとひ甘棠の詠をなすとも忘る、ことなかれ、をほくの年の風月の遊びといふ御製をたまはせたりけるも、此こ、ろにや有けん、いみじくかたじけなし、かの前の司も此召公の跡を追て、人をはぐ、み物を憐むあまり、道のほとり往還の陰までも、思ひよりて植をかけたる柳なれば、これを見む輩、皆かの召公を忍びけん國の民のごとくにおしみそだて、行すゑのかげとたのまむこと、その本意はさだめてたがはじところおぼゆれ。

植置しぬしなき跡の柳はら猶その陰を人やたのまん

〔臥雲日件録〕寶徳四年○享徳元年十一月十一日天英來、○中予又問曰、妙興開山有鞋故事、昔年赴關東時、聞諸道塗、故不載于入東錄、勗曰、州中養于薪柴、妙興開山曾於去寺可三里、買大洲、人不知其故、州中飢饉、歲師勸里中兒童曰、持破草鞋拾于路傍者來、則當與錢、諸兒各從命來者必如約、如此者殆乎一歲、破草鞋積如山、師於是命寺之力僕、刈萩來、切根可盈握、又命折柳枝來、切之亦如萩長、然後從諸